11　福祉サービス利用者のQuality of Lifeに関する研究（利用前後の比較）

研究所　脳機能系障害研究部／高次脳機能障害情報・支援センター　今橋久美子
病院　臨床研究開発部／発達障害情報・支援センター　深津玲子
自立支援局　小田島 明　小松原正道　四ノ宮美恵子　江藤文夫

【背景】近年、リハビリテーションにおいて、機能のみならずQuality of Life（QOL）への関心が高まり、その主観的評価が試みられている。障害者に関しては、これまで障害の原因となった傷病とQOLとの関連を明らかにした横断研究や、介入のない縦断研究、医療リハビリテーションの効果に関する縦断研究は行われているが、福祉サービスの利用とQOLの関係について明らかにした縦断研究は国内外でも例がない。そこで本研究では、福祉サービスを利用する障害者を対象に、利用前後におけるQOLの変化を明らかにする。

【方法】福祉サービス利用者を対象に、WHOQOL26を用いて主観的QOL評価を行う。サービス利用前後にWHOQOL26を施行し、利用者本人のQOL平均点および身体・心理・社会・環境の4領域別得点について変化を分析する。さらに、バーセルインデックスを用いて生活機能評価を行い、QOLとの相関を検討する。評価の施行については、自立支援局内の面接室において検査者が本人に質問する。なお本研究は国リハ倫理審査委員会の承認を得た。

【対象】2010年11月～2011年10月に国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局で就労移行支援または自立訓練を開始した利用者のうち2012年10月末までに終了した29名（男性23名）。年齢は31±12歳（範囲：18～54歳）、障害別内訳は、高次脳機能障害13名、肢体不自由11名、聴覚障害4名、視覚障害1名。利用したサービスは、就労移行支援24名、自立訓練5名であった。

【結果】対象者全員のQOL平均値は、サービス利用開始前3.35→終了時3.51と有意に改善した。領域別では、環境QOLが3.28→3.57と最も大きく改善した。具体的な下位項目としては、「Q14 余暇を楽しむ機会」2.97→3.69、「Q13 毎日の生活に必要な情報へのアクセス」2.86→3.59、「Q1 自分の生活の質」3.14→3.52が有意に改善した。なおこれらの改善は、性別、障害種別、利用したサービス種別を問わず共通していた。一方、生活機能は総じて改善したものの有意差はなかった。

【考察】福祉サービス利用前後において主観的QOL評価を行った結果、QOLが大きく向上し、特に環境QOLが高まったことから、福祉サービスにおいても、個々の生活機能の向上に加えて、環境調整が重要な因子であることが示唆された。また、入所時において生活機能がほぼ自立している場合、生活機能評価の得点は大きく変化しないが、QOLはリハビリテーションの効果を評価する方法のひとつとして有用ではないかと考えられる。